

目的 和服の着装実験結果によれば、若年女性の場合、中・高在学中継続して3年以上の運動歴をもち学校代表として対外試合に出場した経験をもつ者は「着くすれ率」が低くまたフラスバンド、バトン・トワリング部に所属し、外部団体の諸行事に参加するため歩行訓練を受けている場合はその歩容も美しい。そこでこのようなスポーツによる訓練を受けた者と全く受けていない者とを比較した場合、何等かの特異な歩行パターンをもっているのではないかと考え、今回は前報に基づき両者の歩行動作の様相を8ミリカメラによって動作分析し、同時に実施した着装実験による「着くすれ率」との関連につき検討した。

方法 被験者は健康な20歳の女子短大生7名で、スポーツ訓練経験者4名(短距離庭球、フラスバンド、バトン・トワリング)をAグループ、それらの未経験者3名をBグループとした。8ミリカメラ(フジカシントル8)による撮影に際し、被験者はレオタードを着用して身体16部位にリフエレンスマークをつけ、主として上肢のスイングと足の接地に注目した。次に和服の着装実験は、その方法、条件は前報に準じたが実験回数はいずれの実験精度の検討からみて繰り返し数8回を5回にした。

結果 歩行の1サイクルのうち、肩関節はヒールコンタクト時に最大屈曲位を示す。これを左右の体側からみると、正常歩の接地は、まず踵の外側から行われる。訓練未経験者(Bグループ)にもそれが見られる。しかし訓練経験者(Aグループ)では爪先周辺からの着地であった。(2)歩行に伴う腕のスイングは、AグループはBグループに比べて左右差が非常に小さく、また癖のある歩行も認められず胸もとの「着くすれ率」も低い。